不治の病

昔は不治の病と診断された患者に対して、医師と家族の間で、患者本人に対してそのことを伝えるべきか否かの相談が良く行われました。患者が悲しまないように本当の病状を隠すと言うこともしばしばありました。一方、最近は患者に事実を正直に伝えた方が良いという考え方が普及してきました。それは、本人が寿命の短いことを覚悟の上で、残された人生を有意義に生きようと努力できるからです。事実、不治の病を知ってから活躍し悔いのない人生の終わり方をした人の話を良く聞きます。3・11フクシマ事故による被災地の状況を観ると、個人ではありませんが、居住地域が「不治の病」であることを知らされない患者たちのような印象を持ちます。剥き出しの放射性物質で汚染された土地は半永久的に元の汚染の無い状態に戻ることはあり得ないのです。にもかかわらず政府・自治体は「復興が進んでいる」かのような情報を流し続けています。これでは、住民たちは事実に基づいた判断ができません。その上、その情報により被害が過小評価され、補償は少なくなり、加害者への責任追求も弱くなります。放射能汚染地域は「復興不可能」、即ち「不治の病」状態という認識を広めることが必要です。(小倉志郎)